

里親不調を経験した里親に対する里親養育支援の実態

○ 福山市立大学 野口 啓示 (2736)

高橋順一 (地域ケア経営マネジメント研究所・8413), 姜民護 (同志社大学・8570), 石田賀奈子 (立命館大学・6061)

伊藤嘉余子 (大阪府立大学・3930)

〔キーワード〕 里親不調, 全国実態調査, 分散分析

1. 研究目的

2017年の夏に「新しい社会的養育ビジョン」が発表されて以降、施設か里親かという議論が活発化している。施設を擁護する方がよく引き合いに出すのが里親不調の増加への懸念である。確かに、里親先進国として知られる欧米諸国でも里親不調がないところはなく、里親不調の予防は大きなテーマである。

我々の研究班では、2017年冬に、里子の養育を受託している全国の里親家庭を対象に郵送法によるアンケート調査を実施し、さまざまな分析を行った結果を発表してきた。今回の発表は、里親不調に焦点を当てて再分析した結果である。里親不調に関しての第一報として、2018年9月にチェコ共和国で開催された第22回 International Congress on Child Abuse and Neglectにて里親不調を経験した家庭がどのような状況にあるのかを発表した(Noguchi et al 2018)。里親不調を経験された方が17%いたこと、里親の年齢が高いほど里親不調を経験された方が多くなること、里子に障害や被虐待体験がある場合に里親不調が起りやすいこと、また、里親不調を経験された方の幸福度は低く、養育の負担感が高くなることを報告した。

今回の発表では、里親不調を経験された方に対する里親養育支援の実態についての報告を行う。

2. 方法

1) 調査対象

調査対象は、実際に里子の養育を受託している全国の里親家庭4,038か所とし、郵送法によるアンケート調査を実施した。配布に関しては、里親会支部66か所に各会員の里親家庭に調査票を発送していただいた。調査期間は2017年11月8日～2018年1月10日までの約2か月間であった。

2) アンケート用紙

里親への養育支援の状況、および里親不調(委託解除となった)の経験を調査するアンケート用紙を作成し、配布した。里親への養育支援の状況については、「里子が委託される前の里親への養育支援状況」と「里子が委託されてからの里親への養育支援状況」の二つを尋ねた。「里子が委託される前の里親への養育支援状況」は15の質問項目、そして「里子が委託されてからの里親への支援状況」は35の質問項目を用意した。「里親への支援状況についてお聞きします」と尋ね、「全くなかった」を1、「あまりなかった」を2、「少しあった」を3、「十分あった」を4として回答を得た。また、里親不調の経験を尋ねると同時に、里親不調の原因を自由記述欄に記入する方法で尋ねた。

3. 倫理的配慮

収集したデータについては統計的に処理を行い、結果の公表に際して施設や個人が特定されることのないように十分配慮した。なお、本調査については、大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科設置の倫理審査委員会の承認を得ている。

4. 研究結果

1) 回収率

1,726家庭から回答を得た(回収率42.7%)。ただし、ファミリーホームだと考えられるデータや20歳以上の里子のみ家庭のデータ等を除外した結果、有効回答数は1,214(有効回答率30.1%)となった。

2) 里親不調の経験と里親不調の原因

里親不調の経験を尋ねた結果、里親不調がなかった人が927人(83.0%)であった。また、里親

不調を 1 回経験された方が 147 人 (13.2%) あり、2 回以上経験された方が 43 人 (3.8%) であった。

次に、里親不調になった原因を尋ねた。一番多かったのが、「障がい児や被虐待児などのケアに対応しきれなかったため」の 45 人、つぎに「里親家庭に危害（暴力、器物破損、性被害など）が及んだため」の 36 名となり、里子の問題行動から里親不調になったケースが多いことが示された。

また、「里子が家庭復帰を強く望むようになったため」の 28 人といった里子と実親との関係、そして「マッチングの相性がよくなかったため」の 22 人といったケースワークの問題なのではないかと思われるケースもあった。

「里親側の養育に不適切な箇所があったため」の 10 人といった里親に問題があったケースや「経済的な負担が重くなったため」の 5 人と、数は多くないが、里親側の問題で、里親養育を諦めざるを得ないケースがあった。自由記述からは、中学生、高校生といった思春期の課題に里親が対応することの困難さが語られる記述が多く見受けられた。「お財布から札を全部取ってしまう」、「道具の破壊、壁に穴あちこち」というように家庭の中での行動を原因とする場合もあれば、「万引き」、「高校を退学」、「家庭では普通でしたが学校で先生に暴力を振ったり」と学校や地域での問題に対応をしたものの不調となった場合もあった。背景には、「委託後に里子の詳しい説明があった」など、児童相談所から委託前に必要な情報を得られなかったなど、アドミッション段階の課題もあると思われた。

3) 里親不調を経験した里親に対する里親養育支援の実態

里親不調を経験した里親の特徴を明らかとするために、里親養育支援の状況を里親不調を経験した人としていない人を比較した。比較する里親養育支援については、同じデータで行った探索的因子分析から得られた因子を採用した（野口ら 投稿中）。里子が委託される前の里親への養育支援に関しては「委託前支援」と「未委託里親への支援」の 2 因子、里子が委託されてからの里親への養育支援に関しては「里子のニーズと里親の意向を尊重した里親子支援」、「里親研修」、「里親養育をささえるつながりづくりの支援」、「不調時の危機介入」、「レスパイト」の 5 因子である。里親不調を経験した人と里親不調を経験していない人の 2 群に分けて、これら 7 因子の点数を箱ひげ図にプロットし、比較した。その結果、「里親研修」以外の 6 つの因子において、点数が低くなった。里親不調を経験した里親の方が里親養育支援を受けていないことが示された。しかし、有意な差が見られたのは、「未委託里親への支援」($p<0.01$)「不調時の危機介入」「レスパイト」($p<0.05$)のみであった。

5. 考察

本研究結果から、以下の点が示された。

(1) 里親不調の経験をされた方が 17%いた。(2) 里親不調の原因で一番多いのが里子の問題行動であったが、里子と実親との関係、そしてケースワークの問題と考えられるケースが多く見られた。(3) 里親養育支援に関しては、「里親研修」以外の因子で、里親不調を経験した方が里親養育支援を受ける機会が少ないことが示された。特に、「未委託里親への支援」「不調時の危機介入」「レスパイト」といった因子で明確であった。里親不調に直接関わる「不調時の危機介入」「レスパイト」で差が出たことは意義がある結果である。また、里親不調を経験した方の「里親研修」の点数が高くなったことは、里親不調を経験した結果、より里子理解の必要性を感じ、研修会等に参加する機会を多く持ったためと考えられる。

謝辞

本研究は平成 29 年度厚生労働省「子ども・子育て支援推進調査研究事業」課題番号 14「里親家庭における養育実態と支援ニーズに関する調査研究事業」（代表：伊藤嘉余子）の成果の一部をまとめたものである。調査研究にご協力賜りました関係諸氏ならびに里親の皆様へ深謝いたします。